

「研修会等名称」高等教育における e-learning のコーチング・ワークショップ

場所：メディア教育開発センター

期間：平成 15 年 9 月 11 日(木)～ 9 月 12 日(金)

1. 研修の内容

1 日目

- ・ 高等教育での e-learning
米国の教員養成系大学における遠隔教育とその支援システムの調査研究紹介
三輪眞木子教授 (NIME)
- ・ One To One サービス体制の考え方
通信制中等教育における情報技術を活用したサービス事例紹介
柳沢富夫(アットマーク・インターハイスクール学長/慶応義塾普通部講師)
- ・ コーチング技術と e-learning の応用
具体的なコーチング技法とその評価チェックリスト
- ・ 参加者による意見交換

2 日目

- ・ 日本と米国の教育現場での実践
- ・ 大学のゼミナールにおける応用
- ・ 高等教育で e-learning を行う点の注意
青山学院大学、米国大学での教育実践事例紹介
広瀬洋子助教授 (NIME)
- ・ 参加者による質疑、ディスカッション

2. 研修の成果

1) 米国の事例から

三輪眞木子教授（NIME）による、米国の教員養成系大学における遠隔教育とその支援システムの調査研究紹介は、示唆が大きかった。成功事例、失敗事例からは、いずれも人的なサポートが不可欠であることが示された。

もともと現職（有職）者への高度専門教育の必要性が高く、学習者の意欲も高い社会的な背景があるが、遠隔教育を通常の対面教育と同列に位置づけ、手厚いサポート体制を構築している。

なかでも、インストラクショナルデザイナー、プロデューサなどの専門チームにより、ファカルティを全面的に支援し、遠隔コースを育てている体制は、小中高等学校でもみられ、わが国とは相当な開きがある。

本学においても、段階的にこのような支援体制を構築する必要性を強く感じる。

2) One To One サービス体制とコーチング

コーチングの具体的な手法は、カウンセリングを中心にしたメンタルサポートと思う。いくら情報技術を利用したとしても、また孤独になりがちな遠隔教育であるからこそ、メンターの役割は大きい。遠隔教育やeラーニングの成否は、このメンターの資質にかかっている。メンター同士の情報交換や互いの切磋琢磨が不可欠であり、専門職としての位置づけが必要であろう。

3) 参加者同士の意見交換

- ・ ワークショップとしての実務面での示唆よりも、参加者同士の質疑やフリートークによる意見交換が有益であった。専門分野の違うものが、遠隔教育やコーチングをテーマに意見交換できたことは、今後の交流を含め、参考になることが多かった。

3. 授業への研修成果の反映状況

今回のワークショップのテーマであったコーチングの手法については、ビジネス書などにおいても、数多くの解説が見られる。遠隔教育やゼミナールなど、大学教育に直結する事例により、自己の教育活動にも参考にはなった。

現実的には、情報技術や技法などの利用でなく、教師自身がファカルティとしての自覚と、メンターの役割を果たすことが重要と考える。米国のように、教員以外の教育サポート要員の急速な拡大は見込めないが、組織活動としてその重要性を意識し、提案していきたいと考える。

情報処理センターにおけるメディア教育開発支援、教育支援センター設立の動きなどをとあわせて、コーチングの手法を取り入れていきたい。

学部長	FD委員長	FD委員会	総合企画課長	係